

司式:土屋 昌子  
奏楽:山田 絵里

前奏:「父なる神よ、我らと共に住みたまえ」(D. ブクステフーデ)

招詞: 神の家とは、真理の柱であり土台である生ける神の教会です。(1テモ 3:15b)

讚美歌 352「来たれ全能の主」

交読詩編 38:16-23

16 主よ、わたしはなお、あなたを待ち望みます。わたしの主よ、わたしの神よ/御自身でわたしに答えてください。

17 わたしは願いました/「わたしの足がよるめくことのないように/彼らがそれを喜んで/尊大にふるまうことがないように」と。

18 わたしは今や、倒れそうになっています。苦痛を与えるものが常にわたしの前にあり

19 わたしは自分の罪悪を言い表そうとして/犯した過ちのゆえに苦悩しています。

20 わたしの敵は強大になり/わたしを憎む者らは偽りを重ね

21 善意に悪意をもってこたえます。わたしは彼らの幸いを願うのに/彼らは敵対するのです。

22 主よ、わたしを見捨てないでください。わたしの神よ、遠く離れないでください。

23 わたしの救い、わたしの主よ/すぐにわたしを助けてください。

朗読聖書①詩編 71:14-17

14 わたしは常に待ち望み/繰返し、あなたを賛美します。

15 わたしの口は恵みの御業を/御救いを絶えることなく語り/なお、決して語り尽くすことはできません。

16 しかし主よ、わたしの主よ/わたしは力を奮い起こして進みいで/ひたすら恵みの御業を唱えましょう。

17 神よ、わたしの若いときから/あなた御自身が常に教えてくださるので/今に至るまでわたしは/驚くべき御業を語り伝えて来ました。

朗読聖書②ルカによる福音書 8:26-39

26 一行は、ガリラヤの向こう岸にあるゲラサ人の地方に着いた。

27 イエスが陸に上がられると、この町の者で、悪霊に取りつかれている男がやって来た。この男は長い間、衣服を身に着けず、家に住まないで墓場を住まいとしていた。

28 イエスを見ると、わめきながらひれ伏し、大声で言った。「いと高き神の子イエス、かまわなideくれ。頼むから苦しめないでほしい。」

29 イエスが、汚れた霊に男から出るように命じられたからである。この人は何回も汚れた霊に取りつかれたので、鎖でつながれ、足枷をはめられて監視されていたが、それを引きちぎっては、悪霊によって荒野へと駆り立てられていた。

30 イエスが、「名は何というか」とお尋ねになると、「レギオン」と言った。たくさんの悪霊がこの男に入っていたからである。

31 そして悪霊どもは、底なしの淵へ行けという命令を自分たちに出さないようにと、イエスに願った。

32 とところで、その辺りの山で、たくさんの豚の群れがえさをあさっていた。悪霊どもが豚の中に入る許しを願うと、イエスはお許しになった。

33 悪霊どもはその人から出て、豚の中に入った。すると、豚の群れは崖を下って湖になだれ込み、おぼれ死んだ。

34 この出来事を見た豚飼いは逃げ出し、町や村にこのことを知らせた。

35 そこで、人々はその出来事を見ようとしてやって来た。彼らはイエスのところに来ると、悪霊どもを追い出してもらった人が、服を着、正気になってイエスの足もとに座しているのを見て、恐ろしくなった。

36 成り行きを見ていた人たちは、悪霊に取りつかれていた人の救われた次第を人々に知らせた。

37 そこで、ゲラサ地方の人々は皆、自分たちのところから出て行ってもらいたいと、イエスに願った。彼らはすっかり恐れに取りつかれていたのである。そこで、イエスは舟に乗って帰ろうとされた。

38 悪霊どもを追い出してもらった人が、お供したいときりに願ったが、イエスはこう言ってお帰しになった。

39 「自分の家に帰らなさい。そして、神があなたになされたことをことごとく話して聞かせなさい。」その人は立ち去り、イエスが自分にしてくださったことをことごとく町中に言い広めた。

## 祈 禱

恵み深い神さま、聖霊降臨節第 10 の主日、7 月第 3 の聖日に、あなたに招かれ、共に礼拝に与ることが出来ます幸いを感謝致します。

過ぐる一週間、御言葉をもって私たちを導き、お支え下さいましたことを感謝致します。しかし、多くの恵みを戴き、あなたによって全てを支えられているにも拘らず、そのことを忘れ、右往左往し、自分を譲らず、人と争うことがありました。また祈ること浅く、覚えのない所で自らをよしとし、人を傷つけ、無知のゆえに差別する側に立つ者であったことをも覚えます。どうぞそのような私たちの罪を赦し、新しく生きる者とさせてください。

歴史を支配し給う神さま、世界は 21 世紀を迎え既に四半世紀になろうとしておりますが、戦争の時代は終結するどころか、大国は益々軍事力による支配を強め、世界を動かそうとしています。今から 79 年前、国の内外に多くの犠牲を出した戦争に負けた日本は、平和憲法の下、世界の平和を念願し、“平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に取り去るために、国際社会において名誉ある地位を占めたい(日本国憲法)”と願ってきました。

しかし、戦後の経済復興はこの誓いを何時か<sup>いつ</sup>忘れさせ、日本もまた国際政治の只中であって、保持しないと誓ったはずの陸海空軍の戦力を再び強化し、東アジアにおいて戦争の脅威を煽る有様となってきました。神さま、あなたの平和がこの地上になりますように。全世界の諸国民の平和への祈りを、あなたの名によって聞き入れてください。戦争のない世界を築くため、私たちに何を為すべきかを教え、人々の協力、連帯によって、私たちが平和の道具としてお用い下さい。

神さま、教会は去る 6 月 2 日、100 周年の記念礼拝をお献げし、また記念講演会を持つことが出来ました。高倉徳太郎牧師をはじめとする歴代の牧師先生方、そして多くの先達が弛まらず歩み来られた教会の歴史を覚え、一同深い感謝を献げ、この恵みに与る幸いを心より感謝申し上げます。

コロナ感染症に見舞われ日々を過ごす中で、創立 100 周年に向けて実行委員が立てられ、時間をかけて計画されたことが、今、一つひとつ実を結び、あなたに献げられておりますことを感謝致します。特に 2 月から行われた 3 回にわたる記念講演会では、各講師の先生方が掲げたテーマを深く掘り下げ、今を歩む私たちに示唆を与えてくださいました。そこには教会の創設を支えた長老方、また初代牧師の志を継ぐべく生涯を通じて孤高

の努力を献げられた先生方のお姿が鮮やかに示され、信濃町教会の今の在り様に繋がる、共に生きようとする社会への眼差しの原点がどこにあるのかを教えられました。内容は多岐にわたりましたが、聖書の御言葉に立つ教会として語られた事柄を、一同受け留め、励まされて、これからの教会の歩みを共に考え、踏み出していくことが出来ますようにと願います。多くの働きが献げられておりますが、見える所、見えざるところで祈りを献げる一人ひとりをあなたが覚えて歩み行く一年に、希望と祝福とを与えてくださいますように。精一杯の努力と祈りが、未だ足らざるをえないものであることを畏れつつ、この時があなたに喜ばれる献げ物となりますように祈ります。

伝道開始から 100 年、社会と共に様々な時代の困難を乗り越えつつ、現代もまた一層の混迷を深める困難な時代の中であって、あなたがこの小さな群れを導き、信仰を強め、あなたの器として、世のための教会として、歩み続けることが出来ますようにお守りください。私たちの目が隣人の姿を見ることが出来るように平和の主であるあなたによって隣人<sup>となりびと</sup>に出逢わせてください。

核兵器の開発、使用を禁じた核兵器禁止条約が2017年に採択され、21年には批准国が世界 50 か国を超えて条約が発効しました。世界で今なお行われている核実験による被害、環境汚染と健康被害とがこれ以上広がることのないように、と祈ります。広島、長崎の原爆がもたらした苦しみを経験してきた国として、二度と再び、福島第一原子力発電所事故が引き起こしているような、人々が当たり前の生活<sup>ふるさと</sup>や故郷、健康など、大切な掛け替えのないものを失う、という、消えることのない苦しみや悲しみに逢うことがないよう祈らせてください。原発事故によって、そのような苦難を負っている人々と共に、命と環境を守る働きを支援していくことが出来ますように。

今日、この礼拝を覚えながら夫々の場であって集うことの出来ない肢々を覚えて祈ります。病の床にある者、仕事に仕える者、遠くにある者、不自由な中に置かれている者、全て心の内に御許に集い、賛美と感謝を献げることが出来ますように。また、愛する者を失い癒えることのない悲しみの内にある者に、全てを治めておられるあなたの愛と慰めが豊かでありませうように。夫々与えられた思いの中で教会を覚え、助けを求めている者がありましたら、あなたがその道を備え、救いへとお導きくださいますように。

神さま、聖霊の導きを祈ります。これより御言葉を取り次いでくださる鮎川先生の上に、あなたの御力を注いでください。聴く者の耳を開いて御言葉を聞かせてください。

私たちの生ける神の教会であるこの家を御言葉の土台として相共に集い、賛美と礼拝を献げ、生きる糧を得させてください。

言い尽くしえませんが、貧しき感謝と願い、共に献げられている全世界の礼拝の上に、礼拝と共に祝福がありますよう、主イエス・キリストの聖名によって御前にお献げ致します。アーメン。

讃美歌：220「日かげしずかに」

昨日から子どもたちは夏休み期間に入りました。また近年厳しさを増す酷暑と自然災害の重なる中であって迎えた今朝でもあります。私たちは主なる御神の御助けによらなければ、日々の歩みは容易なことではありません。その中であって主の福音に生かされ、また共に、この礼拝に身を献げ、心を献げ、御言葉に聞き、信仰の帯を締め直す時でもあります。

そこで前回に続き、主が嵐を静め、向こう岸に着かれたところから御言葉に聴きます。そこは「**ゲラサ人** (Γερασῆνός) の土地」でした。地図上でどの場所なのか様々な議論があります。それは、マタイ福音書では「**ガダラ人** (Γαδαραῖνός) の地方」となっています(マタ 8:28)。ゲラサかガダラか。もしゲラサならガリラヤ湖の南東 50 km ですし、ガダラならゲラサより 40 km 手前です。

いずれにせよ豚の群が湖になだれ込んで溺れ死んだ出来事を考えると、距離的に疑問が生じます。詳細は別にしても、そこはイスラエルの領地を踏み越えた異邦人の土地で、ヘレニズムの諸都市が点在していた所です。当時のユダヤでは社会的また信仰的立場からこの場所は不浄とみなされ、忌み嫌われていました。またそこには「**墓場**」があるとの記述により、荒野のある故に周辺地域から隔離されている「**汚れた土地**」として強調されていきます。加えてユダヤ人は豚肉を食べませんから、豚の飼育もしませんでした。つまり、主は弟子たちを載せた小舟に同時に乗り、そこで湖に浮かんでいる舟の中で嵐に遭い、それを乗り越えて異邦人の所へ、しかも悪霊によって苦しむ者たちがいる、そういう汚れた土地へ積極的に向かわれたということになります。

福音書の記事から思いますに、「**汚れた霊**」とか「**悪霊**」が出て来る所に心が集まっていることに気づきます。まるでホラー映画を鑑賞するかのようです。私個人的には不可思議には思いませんが、多くのことは不可解です。だからとて、悪霊がいらないとは言いきれません。実際、本人も判らない内に、いつの間にかその人を支配してしまい、悪霊によって人格形成がなされてしまうことがあります。またその人の中にある罪が罪を呼び、悪霊・悪魔を自らが呼び寄せてしまうこともあります。現代に至っても世界各地で起こる凶悪事件や尋常でない出来事は茶飯事です。その多くは、正気だったら起き得ないと判断されるものでしょう。この「**正気**」ということに注意です。それは、自分は正気だと思っているからです。しかし実際、自分というものが明快に理解できていない、厳しく分析すれば、どこか正気を失っているような、地に足の着いていないような感覚に襲われることもありはしないかと。これを思わずして福音を受け止めることは出来ません。この悪霊に取りつかれたゲラサの人の場合、事態は明らかな形で現れます。いくつか特徴が見られます。

第一に、「**衣服を身に着けず、家に住まないで墓場を住まいとしていた**」ということです。これは他人との交わりを失っている姿です。民族にもよりますが、通常は衣服を着なければ、日常生活は難しいでしょう。また家は基本的に人が最も安心出来る所、一番近い人との交わりがある所です。しかしそこに住まず墓場に住んでいる。生きた人間との交わりから断絶しているということも重なります。

第二に 28 節を見ますと、悪霊はイエスが誰であり立場も知っていることがわかります。弟子たちさえ、「**この方はどなたなのだろう** (8:225)」と言っている矢先に、悪霊につかれた人は、主に対して「**いと高き神の子イエス**」と

明言しています。しかし「かまわなくてくれ。頼むから苦しめないでほしい。」とも叫びます。イエスが誰であるか判ったが関わりたくない。そして自分から離れてくれと言う。この心の動きこそ悪霊の本質です。そこで私たちの宣教活動がどうして困難なのか様々な説明がなされることと思えます。究極的には悪霊の働きがあると言えます。それは神に敵対する悪霊の姿です。悪霊は主イエスと関われば苦しめられると判っている。どうしてでしょうか。自分のあり様を変えられてしまう、これまでの生き方を否定され、ある意味、私中心の自由を失うからです。悪霊は人を支配し続けたい、そういう我欲に走ります。そしてどんな形であろうと変えられたくない自分を強く思うが故に、主イエスとかかわりたくない、言うなれば教会(信仰共同体の交わり)との関係を持たせない、断ち切ることに至ります。

第三に、「この人は鎖でつながれ足枷をはめられても引きちぎってしまおう」という状態。彼には尋常でない力があります。悪霊は人間の知恵や力で何とか押さえつけられるものではありません。悪霊を押さえられるのは神だけです。悪霊はこの世界、日本の隅々にまで力を及ぼしています。私たちは、このことをしっかり見据えなければなりません。決して昔話の怪談話と括れないものです。もし呑気に考えているならば、簡単に悪霊に支配されてしまいます。油断ならず入り込まれます。そして隙を狙って用意周到です。常に自分の有利さ優秀さを示しますから、すぐそばに常に悪霊の力が及んでいると思う方が、信仰者としてあり続けるには重要な意識となります。

またそれ以上に重要なことは、主は恐れずに近づき、関わり、悪霊を追い出した驚愕の業をなされました。その時、主が「名は何というか」と尋ねました。人に名を尋ねるとは、直接の関わりを意味します。彼は「レギオン(λεγιών)」と答えました。レギオンとは数千という単位を表し「大勢、大群」を意味します。具体的にはローマの軍隊の名称として使われていました。そこでこの人に取り付いた悪霊はかなり多く力もあつたと見えます。彼は異邦人で、墓場に住み、そして「関わるな」と叫ぶ。しかし主はこの人を見捨てませんでした。教会ではよく「キリストに倣いて」とこの言葉が使われて言われますが、「この出来事のように倣え」とは決していかない限界があります。しかし私たちが主の宣教の器、福音の光とされていることを思う時、神に祈りつつ新たな一歩として宣教の一足を踏み出すことにもなります。決して自力で孤軍奮闘するのではなく、ただ神から頂くしかないこと、悪霊ではなく、聖霊の働きにある、このことをわきまえてのことです。

そこで聖書の場面ですが、悪霊は豚の群れに向かい、中に入ることを主に願い、主は許されました。

スポークスマン的な時事報道を記すマルコ福音書によれば、「2000頭の豚が湖になだれ込み、おぼれ死んだ(マコ 5:13)」とあります。悪霊を追い出してもらったこの人は服を着て正気に戻った。一方のゲラサ地方の人々は、主イエスに対して自分たちの土地から一刻も早く出て行ってほしいと願いました。多くの豚が死んだことと関わりがあります。豚は彼らにとって貴重な財産です。悪霊に取りつかれた人が正気に戻ろうと戻るまいと関わりなく、2000頭もの豚が溺れ死んだ、ということに気が向いています。もし豚が死ななければ、この土地の人たち皆が喜んだかもしれません。そうであれば、このゲラサの人々も悪霊の支配下にあつたとも考えられます。一人の人の命が救われることよりも、豚という財産の方が大切で、彼らは

自分では正気だと思っていたのでしょけれども、生身の人間の生き死によりも豚という財産を愛し、主との交わりを拒絶した。それも悪霊はこの町の人々に対して、レギオンと名乗った人のような大胆なあり方で力を及ぼしてはけません。むしろ外から判らないように隠れた仕方、複数で近づき、しかしその支配を確実なものとしていたことに他なりません。ここに悪霊の最大の特徴と企ての真実が浮かんできます。一人単数では行わないのです。

悪霊は必ずや複数で数を従えて攻撃します。それは目の前に一人しかいないと言っても陰にいるということです。目の前に一人だとしても、後ろではかなり数が居る、力があるということです。見ると見えないとに拘わらず姿がそこにあるということです。

そこでこのレギオンと名乗った人は主の力によって正気に戻り、「お供をしたい」と懇願しました。これが正気に戻るということです。聖書では、単に普通の生活をするようになるということではありません。神に造られた者として、神の子、神の僕として生きるようになる、変えられるということです。主に敵対していた者から、主と共に生きる者とされる。この時に主は、「自分の家に帰りなさい。そして、神があなたになさったことをことごとく話して聞かせなさい。」と、このレギオンと名乗る人に命じました。主は悪霊を追い出したこの人を町に残し、主の御業を告げる者、証しをする者として立てられたのです。ゲラサの人々もまた、悪霊の支配から神の支配へと向かい、神の下に立ち帰らなければならないという驚愕の事実を示します。その為の神の救いの御業に仕える者として、主はこの人を主の証し人、福音宣教の従事者に立てられたということです。

多くの教会では家族伝道の難しさ厳しさが言われ続けています。我が身を思えば真なりのお話ですが、もう過去には戻せませんが、冷静に心に留めるならば、「神があなたになさったことをことごとく話して聞かせなさい。」ということが、どうあるか問われているということです。これも今まで見聞きしている事態ですが、家族や友人、近隣の人たちに対して、「キリスト教とは何ぞや」「救いとはこういうものだ」などの説明を知りうる限りのことを、それこそ神学書や解説書を開いて自分なりに一所懸命説明しようとする中で新たに難しさを感じたり挫折したり、またそのことによって誤解されたり、そこから教会への道を閉ざしてしまったりなど、よくあるものです。しかしキリストの福音というものは丁寧に熱心な説明で伝わるものではなく、福音の伝達は、まず「神は自分に何をされたのか」、それは良くも悪くも、です。そのことを告げていくことです。自分がどう思ったか、どうなったか、そのことで精査をするのではなく、全てに亘って自分がどんなにその中で変えられたのか、救われて生まれ変わり、喜ぶ者とされているのか、イエスという方がどんな方なのかをその中で告げていくということです。いいことばかり話せば教会から離れます。「皆さんそう思うでしょう」、と言うだけです。ただで本当に困窮迫っている人たちに、いいことだけ伝えたって、結局「私は蚊帳の外だ」と思われるわけです。敷居がどんどん高くなってしまっただけです。ではなく、自分の生きざま全てを献げてそのことを伝えるということです。それができなければ伝道にならないということです。その中で思うには、最大の力は家族愛、ここに掛るということです。信頼や愛のない所では伝わらないということです。まして自分の地位や名誉、世間体を第一にして、「指折り教会員が何人になるだろうか」、「何人洗礼を授ければいいだろうか」、そのようなことを

思っていたら福音の根幹から外れてしまいます。正直、量よりも質が大切ということです。だからとて、神学者を生み出したり、宣教師を生み出したりする、それが目標でも目的でもありません。一人ひとりが生き様を伝えていく、そこには「神あってのものなのだ」、そのことを伝えていくことです。

主の御業は、人の知識や理性や思いを超えたところに示されます。私にも皆さんにも、常に困難が伴います。そして常に「霊の闘いが隣り合わせ」と心して、絶対的な力を持って私たちを守り導いてくださる神に信頼を置き続けること、それが第一です。主が教えて下さった祈り、「我らを試みにあわせず、悪より救い出されたまえ。」、このことを毎日に祈らずにはいられない事実です。現実です。使徒パウロがエフェソ書(6章)に書き記しましたように、「主に依り頼み、悪魔の策略に対抗して立つことができるように、神の武具を身に着け(エフェ6:10.11)」「どのようなときにも、“神の御霊”に助けられて、祈り、願い求め(エフェ6:18)」てゆく、このことが重要になります。私たちもこれからの日々、天つ御国に入る日まで、隣人に主の御業を証しし、伝えてゆきたいと願います。

### 祈りを献げます。

恵と憐れみに富み給う主イエス・キリストの父なる御神さま、新たな時の中で御言葉に聴き、祈りと賛美をもって礼拝を献げられ感謝致します。

私たちはこの世にあつては様々な困難に遭う中で、時としてあなたを忘れ、また自分の力や他の人々の思いに揺れ動くこと多くあります。弱い者です。どうか御言葉を信じ、あなたを第一としてあなたに祈り願いつつ歩む日々でありますように。そして一人ひとりが隣人に対して証しを為していく者とさせてください。また全てがあなたの御旨に適うものでありますように。

ここに集うべくして集い得ない方々の上にも、あなたからの力と慰めをもって顧みてください。

共に祈られる祈りと共に、尊き主の聖名によって御前にお献げ致します。アーメン。

### 讚美歌:356「インマヌエルの主イエスこそ」

#### 献金・感謝(山本典子)・主の祈り

聖なる神さま、今朝、私たち一人ひとりの名前を呼んでくださり、またオンラインの許で、あなたを賛美・礼拝できましたことを心から感謝致します。御言葉を感謝致します。私たち、日々、悪から救い出して頂き、御霊の力に依り頼んで隣人と繋がっていきますように、この一週間をお守りください。

私たちは、あなたから必要な物を頂戴致しております。感謝致します。感謝と献身の徴として、その中からお献げ致します。どうぞ教会の御用のためにお使い下さい。

主イエス・キリストが教えて下さいました主の祈りを共に祈りまして、この一週間の歩みを強く歩み出させてください。「主の祈り」…アーメン。

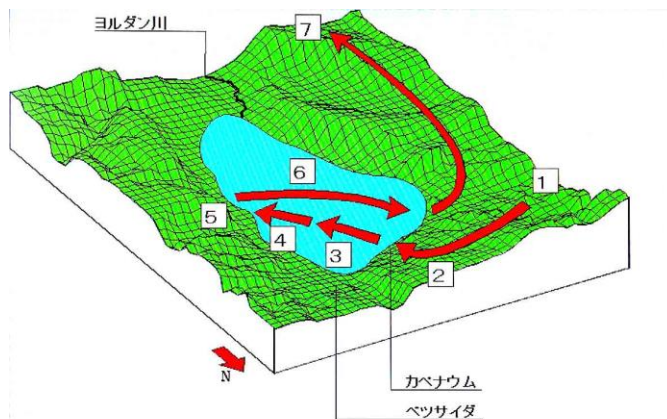
#### 派遣:讚美歌88「心に愛を」

祝福:主イエス・キリストの恵み、父なる神の愛、聖霊の親しき交わりが、ここから遣わされていくあなたがた一同と共に、今後も永遠にあるように。アーメン。

報告:教会学校礼拝変更。9月第3週より、全体礼拝月を除き、隔月毎の予定で、本日の礼拝次第のように、幼稚等科・中高等科二手での礼拝となる。その場合小礼拝堂を使う場合があるので使用者は注意。

後奏:「われ深き淵より汝を呼ぶ」(H.シャイデマン)

### 【嵐の中で眠るイエス(出来事の順序) マコ3:13-6:13から】



1. イエスは、山に登り、十二弟子を任命された。
2. イエスは弟子たちと「家(イエスの活動の拠点カペナウム)に戻られた」。イエスは群衆を教えるのに忙しく、食事をする暇もないほどだった。
3. 弟子たちとイエスは、夕方になって、ガリラヤ湖にこぎ出した。
4. 暴風雨が起り、船は沈む恐れがあったが、イエスは眠っておられた。弟子たちがイエスを起こすと、イエスは風に命じて、それを静められた。
5. 彼らは、ゲラサ人(あるいはガダラ人)の地に着いた。そこでイエスは、1人の男から、汚れた霊どもを追い出し、豚に移された。
6. イエスと弟子たちは再び湖を渡った。イエスは、ヤイロの娘をよみがえらせ、ご自身の着物にさわった女をいやされた。
7. 彼らはナザレに行くが、そこでイエスは受け入れられなかった。イエスは、みことばを語り、いやしをなし、悪霊を追い出させるために、弟子たちを送り出された。

出典:Jばいぶる・マップ